

【審査論文】

幼児の図形からの見立て描画にみられる初発反応

島田由紀子

The first reaction in drawing which the children's diagram diagnosis

Yukiko SHIMADA

要旨

幼児に18個の図形（三角・丸・四角、青とピンクの線画）を提示し、何かに見立てた描画の初発反応について取り上げた。初発反応に焦点をあてることで、幼児が見立てやすい図形の形と色について把握することができ、描画のモチーフからは、図形からイメージして描く内容を知ることができる。形や色を提示するという条件のもと、年齢差や性差にどのような差や共通性がみられるのか明らかにすることで、幼児の造形活動や指導への手がかりにすることが期待できる。

調査対象者は4歳児クラス（男児14名、女児14名）、5歳児クラス（男児14名、女児10名）の52名で、調査員との個別調査で行った。その結果、取組み数は年齢や性別を問わず約80%以上であったことから、幼児は「見立てよう、描こう」という意欲が高いことがわかった。初発反応の図形は、図形丸と図形三角が多く、幼児にとって図形三角や丸は親しみやすい形だと考えられる。線画の色はピンクよりも青の方が多く、性別による嗜好色の影響はなかった。4歳児クラスでは見立ての描画として成立するには、見立ての理解とイメージしたものを描くことの難しさがうかがえた。しかし、女児は4歳児クラスでは低い成立数が5歳児クラスでは90%と高いことから、この時期の女児の見立てや描画への興味関心の高さやイメージする力、描写力の伸びがうかがえた。色からの見立ての描画の成立数は形に比べて低く、見立ては色よりも形が優先されることが明らかになった。モチーフに着目すると、見立ての不成立の描画には年齢性別問わず、提示された図形への2重描きや塗りつぶし、図形の中や外への自由な描画などがみられた。見立てが成立した描画は、4歳児クラスの男児では「車」「メロンパン」、女児では「星」「ドア」、5歳児クラスの男児では、「家」「ドラゴンボールの玉」「おにぎり」、女児では「雪だるま」「ロールケーキ」などであった。男児の「車」や女児の擬人化された「雪だるま」などには自由画にみられる性差との共通性が、食べ物を見立てて描画することは図形からの連想語調査との共通性がみられた。

幼児が図形から何かをイメージして描画表現するには描写力が必要となるため、5歳児クラス以前では難しいことが推測された。しかし、5歳児クラスの見立ての描画では形からの成立数をみると、それまでの間にいろいろな経験をしてイメージを広げることや造形活動や生活経験を重ねることで、見立てるイメージ力も描写力も備わることがわかった。この時期の幼児が考えたり思い浮かべたりすることや、形や色やさまざまな素材を使った造形活動を重ねることが、その後の創造的な造形表現につながるということが考えられた。

キーワード：幼児 見立て 初発反応 図形 描画

children diagnosis first reaction diagram drawing

1. はじめに

幼児の描画表現には幼児のそのときの思いや考えが表われるとされている。これまでも多くの研究者によって、自由画を中心に年齢を軸とした描画発達や特徴について報告がされている。国内での近年の描画発達研究やその関連研究においても、年齢を軸にした描画発達では幼児や児童の描画を多数収集してその特徴について比較検討することによって成り立っている（中尾、2011）（川越・郷間等、2011）（今給黎・藤原等、2006）が、この場合ひとりの幼児につき1枚の描画収集が主である。あるいは時期をおいての複数の描画収集が行われる場合でも多数の作品収集は行われることは少ない。また、自由画の研究では課題は与えられず、幼児に描きたいものを書くよう教示するので幼児自身の思いや考えが表現されている反面、描写する力が備わっていないと、どんなにイメージが広がっていてもそれを描き表すことが難しいことが考えられる。自由画では描く内容を幼児自身に任せるので、描くための契機になるような言葉がけや事柄がないことで、何を描いてよいのか決められない幼児も少なからずいる。そこで、自由な中にも、図形から何かを見立てて描く、という課題を設けることで、イメージするきっかけを設けることにした。さらに、1枚の調査用紙に18個の図形を印刷し、その図形を何かに見立てて線描を描き加えることによって描画表現する、という課題を設定することで、一回の調査で最大で18作品を収集することが可能になると考えた（図1参照）。

図形からの見立ての描画とは、図2のように提示された図形三角・丸・四角（以下、△○□）に対し何かに見立て線描を加えて表すことである。自由画とは異なり図形を何かに見立てて描くことから、イメージを喚起する機会を設けてそれを描き表すことで、幼児のイメージする力と描写する力を知ることができると考えた。自由画より制限が加わる一方、提示された図形に線を1本描くだけで描画表現になるので、描写力が十分でなくても表現することが可能となる場合もある。したがって、イメージする力と描写する力の両方があって描画表現となると考えられる。

これまでの調査の結果から、4歳児クラスより5歳児クラスの方が図形の見立ての描画に取り組もうとすること、見立てとして成立した描画が描けること、男児よりも女児の方が見立ての成立した描画が描けること（島田、2009）、描画発達では自由画とは異なる表現の分類が考えられること（島田、2010）が明らかとなった。また、特に図形○に対し「顔」や「頭」のパターン化された描画が反復表現されることが少なくはないこと（島田、2011）もわかった。

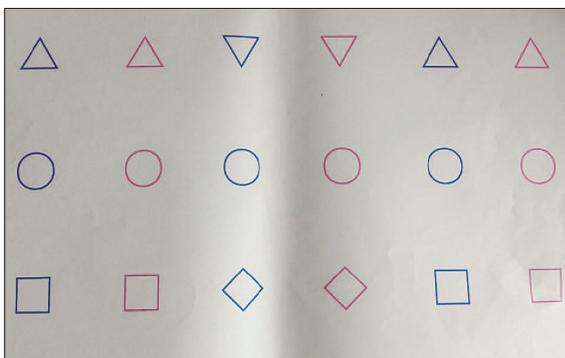


図1 調査用紙

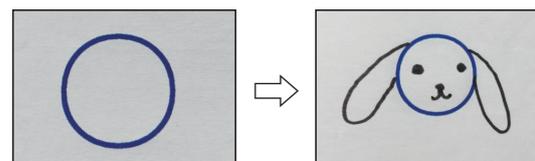


図2 図形を見立てた描画の例

2. 目的

そこで、幼児に18個の図形を提示し、図形を何かに見立てて線描を描き加えるよう教示した描画の、初発反応を取り上げることを考えた。最初に図形から見立てた描画は、その後の見立てた描画とは異なり、図形から最初にイメージしたものや描きたいことを表していると考えられる。これまでの調査結果から2つ目以降は、同じパターンが繰り返されることも予想される。たとえば図形○に対し、表情や耳の形を変えて描くことで、「クマ」「ウサギ」「猫」「犬」などを部分的に変えるだけでバリエーションが増えることになる。したがって、ここでは初発反応に焦点をあてることで、図形から何を見立て描画表現したのか検討することにした。

検討内容は、図形の形や線画の色、またそれぞれの見立てへの影響、モチーフの特徴である。それらについて年齢別性別に比較検討する。このことにより、見立てに取り組みやすい形や色、またイメージと結びつきやすく、すぐに描きたいと思うモチーフの傾向や特徴を知ることができる。幼児のイメージすることやそれにとまなう描画表現について把握することで、造形活動や指導法に反映させることができると考えた。

3. 方法

(1) 調査用紙

幼児ひとりにつきA3の調査用紙を1枚提示した（図1）。調査用紙には、図形△○□が6個ずつ計18個、そして各図形3個ずつの線の色は青とピンクで印刷をした。提示する図形の色として、色相環から均等に選ぶ方法がある。しかし、ここでは好きな色の図形の方がより取り組もうとするのではないかという推測により、男児と女児の好きな色による図形を提示することにした。線の色を選択は、幼児の色彩感情を調査した結果（島田、2002）により、男児が好きな色は青、女児が好きな色ではピンクであることから選んだ。青とピンクは、男の子色女の子色といった性による色の使い分けの代表的な色であると考えられ嗜好調査でも、男児は青、女児は桃色（ピンク）が好まれ、特に桃色は男児も女児も女の子色と認識されている（酒井・安藤 等、2005）ことから選択した。また、提示した図形の選定については、皆本（1991）による幼児の図形の獲得として○+□△が挙げられており、基本図形としている。図形の内側と外側に描く場合のモチーフや表現の特徴については、今後の分析対象と考えているので、図形が閉じた形である△○□を採用した。図形は好きな方向から見立てても良いということは教示で伝えているが、上下（△▽、□◇）に印刷しておくことで調査用紙を回転せずとも角度を変えて図形と向き合えるようにした。

(2) 見本

幼児に図形を何かに見立てて線描を描き加えることを説明するために、見本として長方形から見立てた描画として「カーテンのついた窓」と「電車」の2点を示した。

(3) 手続き

幼児と調査員との個別による対面調査で実施した。

幼児に見本を示し、調査用紙の図形を何かに見立てて点や線を描き加えるよう指示した。調査用紙に見立てて描き加えるときには、調査用紙を好きな方向に回しても良いこと、どの図形から始めても良いことを伝えた。提示する図形に男児と女児の好きな色を用いることで取り組む図形の色に性差がみられるのか検討することに重きをおいたので、画材は黒のサインペンを用意した。

描き終わるごとに何を描いたか尋ね、絵の近くに記録した。

(4) 調査対象者

調査対象者は、都内の幼保園の園児、4歳児クラス男児14名、女児14名、5歳児クラス男児14名、女児10名の計52名である。

(5) 調査時間

調査は幼児自身が完成や終了を認めるまで行った。

4. 結果と考察

調査用紙には18個の図形が印刷されているのでひとりにつき最大で18個の見立ての描画となるが、ここでは初発反応のみを取り上げる。また、使用した図形の個数は問わない。

(1) 初発反応の見立ての取組み数

提示した図形に線描が加えられていた場合は、その線描が見立てとして成立していなくても見立てに取り組んでいたと判断した。見立ての取組み数からは見立てよう描こうとする意欲を知ることができる。

見立ての取組み数を図3に示した。男児は4、5歳児クラスともに92.9%で差がみられなかった。女児は4歳児クラス(78.6%)よりも5歳児クラス(100%)の方が多かった。特に5歳児クラスの女児の全員が見立ての描画に取り組んでいたことから、この時期の女児は見立て遊びを好み、絵を描くことが好きだと考えられる。調査用紙にまったく描こうとしなかったのは、4歳児クラス男児1名、女児2名、5歳児クラス男児1名であった。

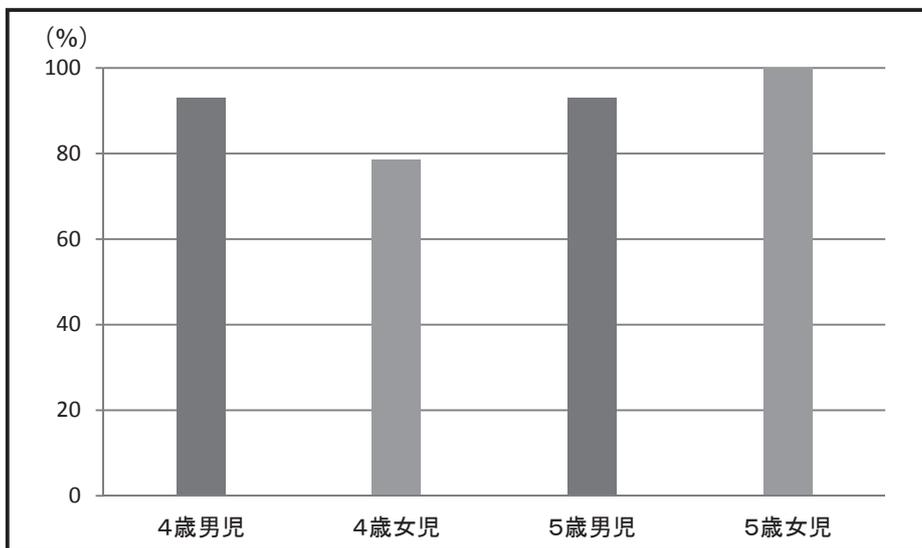


図3 初発反応の取組み数

(2) 取組みの図形別選択数

調査用紙には3種類の図形△○□が並んでおり、どこから始めても良いことは幼児に伝えている。したがって、最初に選択した図形は幼児にとって見立てやすい図形であるか、好きな図形であることが考えられる。見立ての取組みをした幼児の初発反応で選択された図形を図4に示した。

全体では図形△が40.5%と高く、次いで図形○34.0%、図形□25.5%となった。クラス別、性別にみると、4歳児クラスの男児では図形△○が46.2%と同数で、図形□が7.6%と少なかった。女児では図形

△□がそれぞれ36.4%で、図形○は27.2%であった。5歳児クラスの男児も図形△が46.2%と多く、次いで図形□の30.8%、図形○の23.0%であった。女児は図形○がもっとも多く40.0%、図形△□はそれぞれ30.0%だった。

5歳児クラスの女児を除き、図形△の選択が高いことがわかった。図形△は調査用紙を正面からみると、上の列にあることから、どこから描いても良いといわれても一番上の列から取組んだ可能性が考えられる。大橋（2007）の調査では、男児は三角形、女児は円形を好むとの報告があるように5歳児クラスの男児の図形△の選択、女児の図形○の選択が多かったことから、好きな図形から取り組む可能性があることも考えられる。

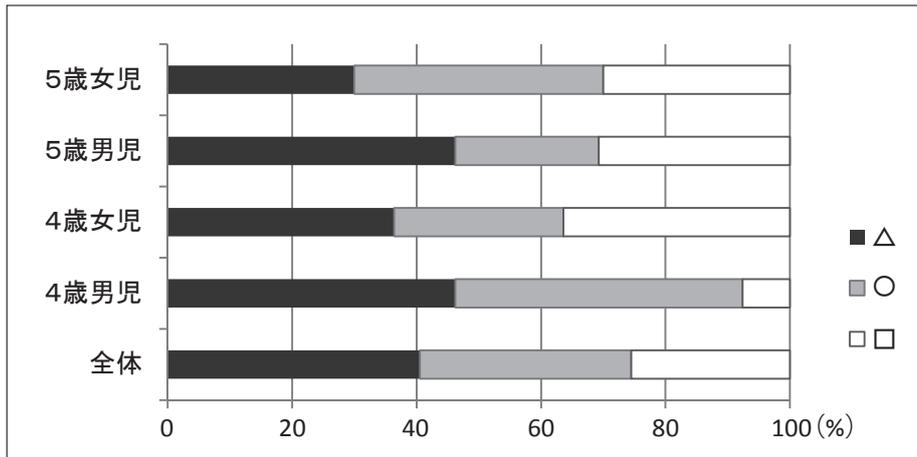


図4 初発反応で選択された図形

(3) 取組み図形の線画の色

調査用紙の図形の線画の色は、青とピンクをそれぞれ9個印刷している。どちらの色が初発反応で選択されているか知ること、幼児が見立てよう、あるいは描いてみようと思う色の線画の色がわかる。前述したように、色による見立てやすさだけでなく色の好みも影響すると予想される。その結果は図5のとおりである。

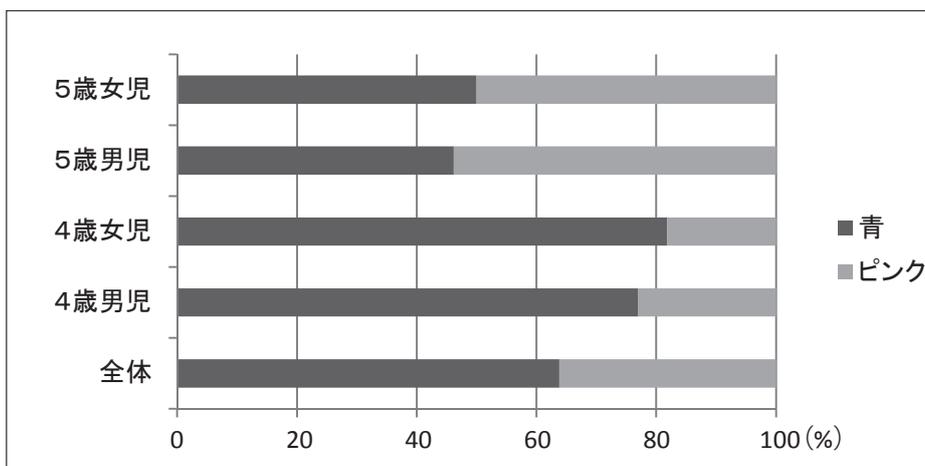


図5 初発反応で選択された線画の色

全体で見ると、青の線画が63.8%と多かった。クラス別年齢別では、4歳児クラスの男児（76.9%）、女児（81.8%）ともに青の選択が多く、ピンクは少なかった。

5歳児クラスでは、男児はピンクの方がやや多く（53.8%）、女児では半々であった。

男児は青が、女児はピンクが好きな色として挙げているが（島田、2002）、好きな色だからといってその色の線画から見立てる絵を描き始める、ということではないことがわかった。見立てて絵を描く、という条件が加わると、色の優先度が下がることが推測される。

(4) 形による見立ての成立数

見立ての取組み数は調査対象者の幼児の約80%以上であったが、見立てとして成立しているか調べることにした。幼児が図形の形による見立てを理解して線描を描き加えていたのか知ること、見立ての理解や描写力、そして見立てるときの図形の形の影響を、描かれたモチーフから把握しようと考えた。図形の見立ての成立とは、たとえば図形△を「山」や「テント」など一般的に三角であると考えられているモチーフを描いた場合であり、見立てが不成立ということは図形△を「太陽」や「ドーナツ」に表している場合を指す。

その結果（図6）から全体では、見立てに取り組んだ幼児のうち、51.9%は図形を活かした見立てが成立した描画を描いていることがわかった。クラス別性別にみると、最も高い成立数は、5歳児クラス女児の90%、次に5歳児クラスの男児の71.3%であった。4歳児クラスよりも5歳児クラスの方が形からの見立てを理解し、描画表現できることがわかる。もっとも低いのは4歳児クラス女児の21.4%、次に男児の35.7%だった。

これらの結果から、4歳児クラスでは「見立てを理解する」や「見立てたものを線描で表す」ことがやや難しいといえる。一方、女児の4歳児クラスと5歳児クラスの差からは、この時期の女児の理解力や描写力、イメージする力の伸びを示していると考えられる。また、図形○△□からの連想語の調査（島田・大神、2011）では、図形○からの連想がもっとも多かったが、見立ての描画では必ずしも図形○の初発反応が高いとはいえず、図形であっても連想して言葉で伝えることと描画で表すことはイメージも異なることが考えられた。

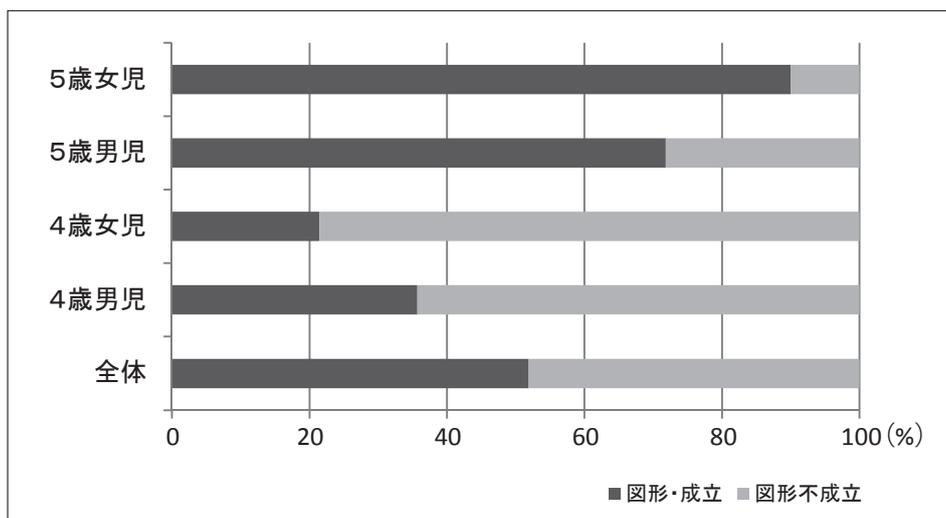


図6 図形の形による見立ての成立数

(5) 色による見立ての成立数

図形の線画に色を用いていることから、図形の色を意識した見立ての描画としての成立数を把握することで、幼児が図形を見立てるときの色の影響を知ることができる。図形の色による見立ての成立とは、図形から何かに見立てて描いた描画が図形の色をいかして見立てを成立していることを指す。例として、ピンクの図形△を「いちご」、青の図形□を「車」に見立てるなど、その色が一般的な事物やその色の事物が存在する場合は挙げられる。その結果を図7に示した。

全体では、23.1%の成立数であった。もっとも多かったのは、5歳児クラス女児の60.0%、次いで5歳児クラス男児の28.6%、少なかったのは4歳児クラスの男児の0%、女児の14.3%であった。女児の方が色への関心が高いという指摘（皆本、1991）があるように、また概念的な色の使い方が女児の方が早いことが明らかのように（島田、1999）、女児の方が色を意識した見立ての描画を描くことが可能なのかもしれない。

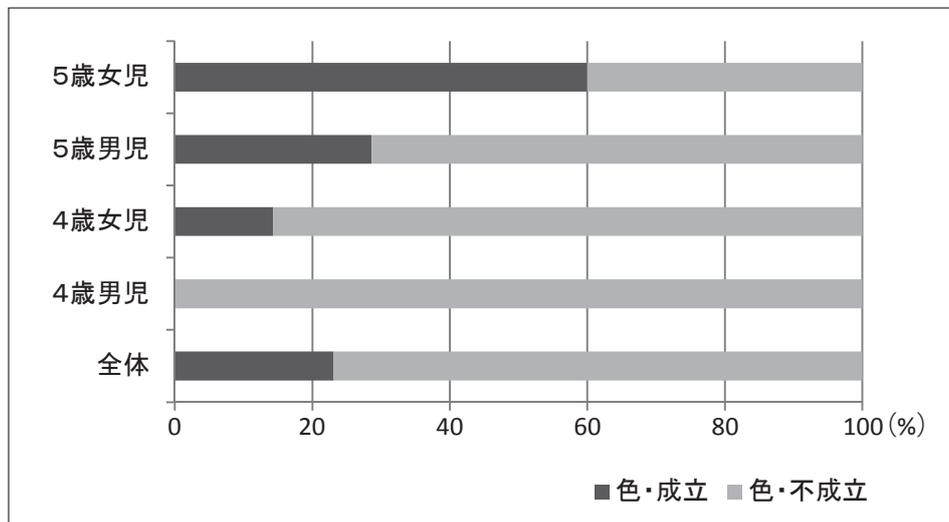


図7 図形の色による見立ての成立数

(6) モチーフの特徴

見立てとして不成立だった描画は、年齢や性別を問わず、提示された図形の線に「重ね描き」、図形を「塗りつぶす（何を描いたかの問いに図形名を答える場合が多い）」、図形を意識しながらも見立てには至らず「内側や外側に描く」、図形をまったく意識せずに「自由に描く」、「図形模写」などがみられた。

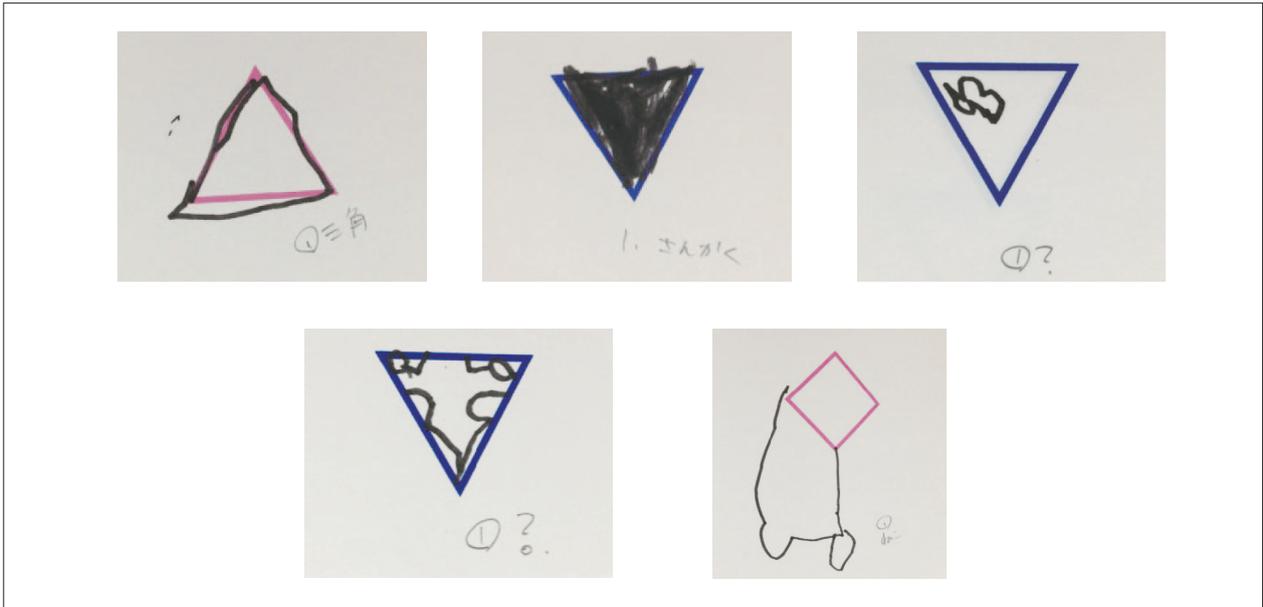


図8 見立ての不成立の例
 (上左から：三角、三角、わからない 下左から：わからない、ねこ)

以下に取り上げた描画は、図形の見立てが成立している描画である。

① 4歳児クラス男児

初発反応で図形の見立てが成立した特徴的な描画を図9に示した。

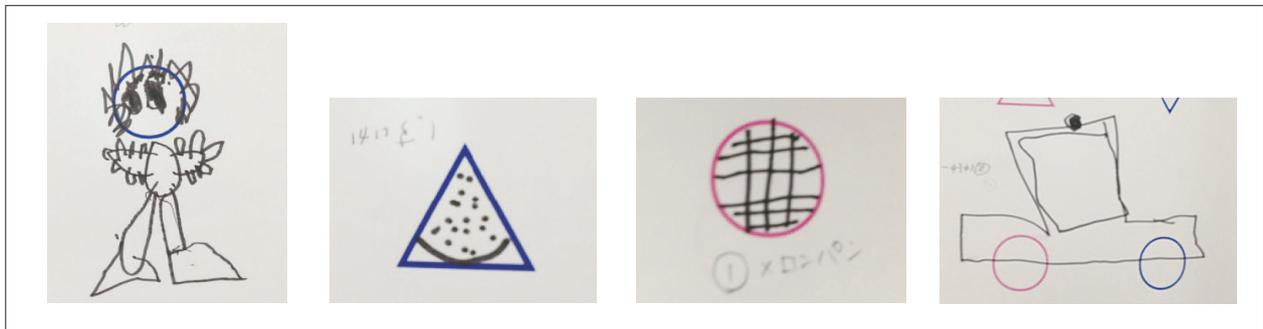


図9 4歳児クラス男児の形の見立ての成立例
 (左から：ママ、スイカ、メロンパン、車)

これらの見立ては、形からの見立ては成立しているが、線画の色の影響は受けていないと判断した。図形の見立てでは、「スイカ」のように丸い形のままでなく切った状態を表すことや、「ママ」の顔だけではなく、体や手足を描き加えて「ママ」の全身にしている。これは連想語の調査ではみられない、描画ならではのイメージであり表現方法である。「車」のように複数の図形を用いた見立ての描画は、調査対象者の初発反応ではこれが唯一の描画であった。この「車」は乗り物であっても見本の描画とはまったく異なる。自由画での男児が描く特徴として乗り物が挙げられていること（皆本、1985）とも重なり、図形を用いながら好きなモチーフを初発反応だからこそ描いたことも考えられる。

② 4歳児クラス女兒

4歳児クラス女兒の見立ての成立例は図10のとおりである。

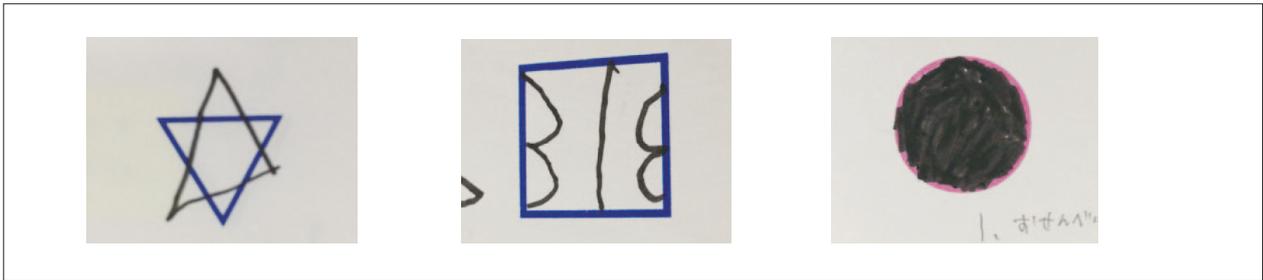


図10 4歳児クラス女兒の見立ての成立例
(左から：星、ドア、おせんべい)

「星」「ドア」は、形としても色としても成立していると判断した。「星」のイラスト等では青い星も存在し、「ドア」も玩具の家のドアやイラストの家のドアとしては青い場合もあるからである。「ドア」は教示の際に見せた見本の「カーテン付きの窓」と似ており、それを模倣したことが考えられる。初発反応で女兒のみの模倣であった。図形模写は男児よりも女兒の方が通過率が高いという報告（郷間・川越等、2013）もあることから、単純な描画であればそれを記憶して描き表すということに至ったのかもしれない。「おせんべい」は「塗りつぶし」ではないと判断した。「塗りつぶし」の場合はその図形の名称を回答することが多いことから、この場合は「黒いおせんべい」を表していると推測した。

③ 5歳児クラス男児

5歳児クラス男児の見立ての成立例は図11のとおりである。

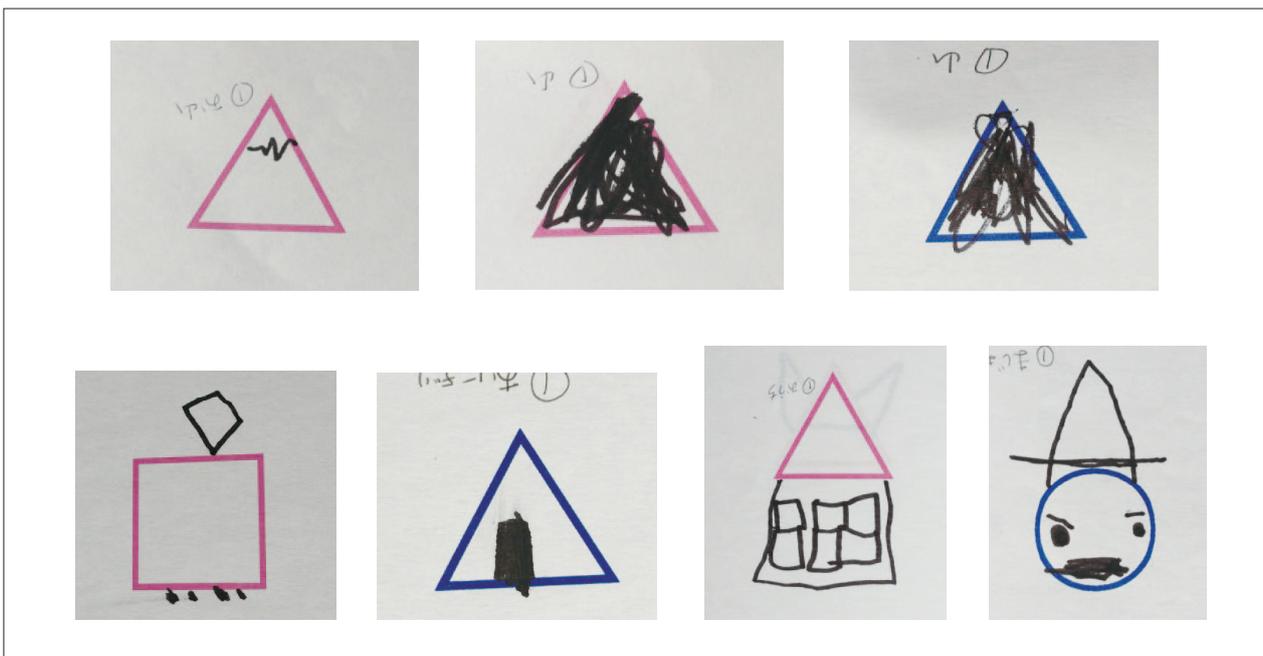


図11 5歳児クラス男児の見立ての成立例
(上左から：山、山、山 下左から：電車、おにぎり、家、魔女)

5歳児クラス男児の見立ての成立例では図形△を「山」に見立てた描画が複数みられた。これも、図形の「塗りつぶし」ではなく、「山」を表現していると判断した。また、左の「山」のように、見立ての描画では図形に線を1本描き加えるだけで表すことも可能であり、描写力がなくても描きやすいことがわかる。図形△に対して同じ「山」を表すにも、表現方法が複数みられる例でもある。下の「電車」では見本で提示した「電車」に似ており、模倣したことが推測される。初発反応での「電車」の模倣はこの描画のみであり、男児特有の自由画の特徴との共通性が認められた。「おにぎり」は図形の真ん中に黒い海苔を描くことで特徴を表現している。「家」は成立例に挙げた中では、形でも色でも見立てが成立していると判断した表現である。「魔女」は、帽子を描き加えたことによって表されている。

④ 5歳児クラス女児

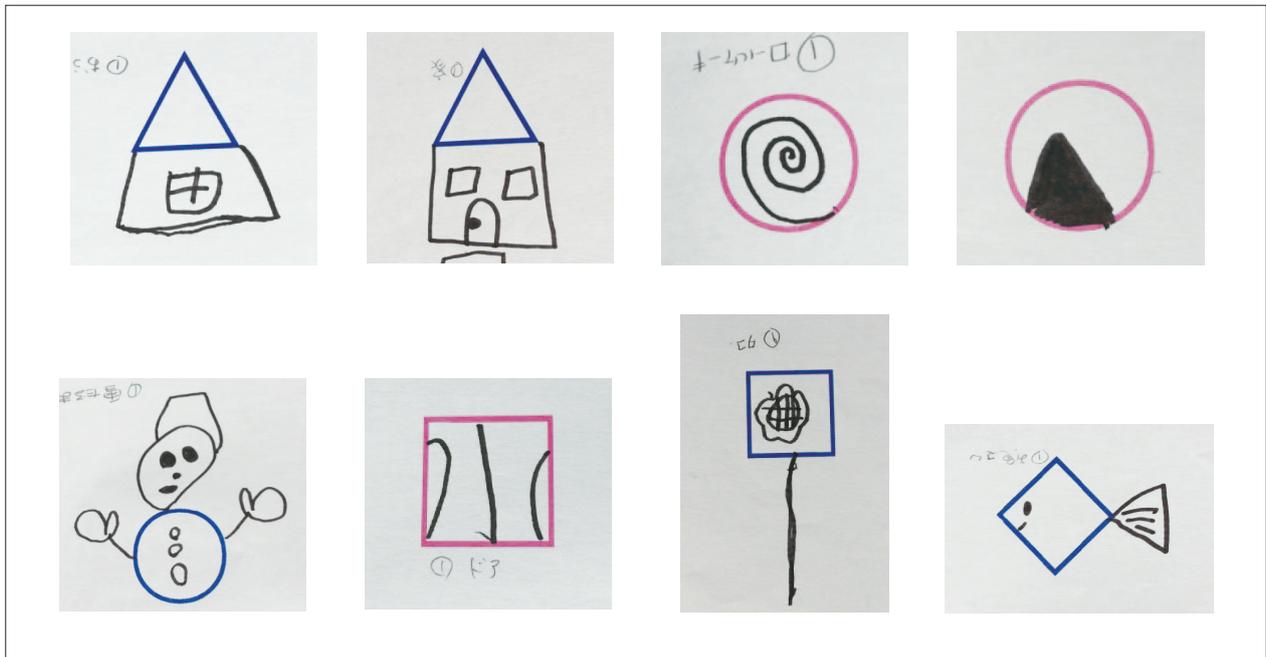


図12 5歳児クラス女児の見立ての成功例

(上左から：家、家、ロールケーキ、おにぎり 下左から：ゆきだるま、ドア、凧、魚)

「家」は形と色ともに見立てが成立している。同じ「家」であっても、この2つの「家」からも幼児によってイメージする家の窓やドアなどは異なることがわかる。「食べ物」は図形○の見立て描画に認められた。渦巻きの線を1本加えて「ロールケーキ」になり、黒い面を描いて「おにぎり」になる。5歳児クラス男児にみられた図形△の「おにぎり」もこの図形○の「おにぎり」も、形からの見立ては成立している。図形○に同じ○を描き加えて「雪だるま」として表しているのは、色よりも形を優先してイメージするからだと考えられる。図形□を「ドア」に見立てた描画は、4歳児クラス女児の「ドア」の見立て描画と同様に見本の「カーテン付きの窓」の模倣である。見本では「電車」も提示したが「カーテン付きの窓」の模倣を試みたということは、この女児にとって乗り物よりも記憶に残りやすく描きたいものだったと考えることもできる。図形□を「凧」に見立てて描いており、「凧」には花が描かれているが、これも女児的な表現であり自由画の性差の特徴にも通じる。図形□を魚に見立てたのは折り紙の金魚や壁面構成などの影響も考えられる。

5. まとめ

初発反応の取組み数は、クラスや性別を問わず約80%以上であった。幼児は見立てることへの興味関心や描画表現への意欲が高いからだと考えられる。初発反応の図形は、5歳児クラスの女児は図形○、4歳児クラスの男児は、図形△○が同数、5歳児クラスの男児、4歳児の女児では図形△が多かった。幼児にとって図形△や○は親しみやすい形である一方、図形□、あるいは図形◇の正方形については身近な物として正方形が少ないことから、イメージすることが難しいことが初発反応として少ない結果となったのかもしれない。線画の色については、ピンクよりも青の方が男女とも多く、好きな色だから見立てを試みようとするわけではなかった。幼児期での見立ての発生は色よりも形が優先されるという報告（横出・寺戸、1990）があることから、描画による見立ての表現でも同じ傾向にあることがわかった。また、4歳児クラスでは見立ての描画として成立するには、見立ての理解とイメージしたものを描くことの難しさがわかった。しかし、女児は4歳児クラスでは低い成立数が5歳児クラスでは90%と高いことから、この時期の女児の見立てや描画への興味関心の高さ、イメージする力や描写力の発達がうかがえた。色からの見立ての描画の成立数は、形に比べて少なく、見立ては色よりも形が優先されることがわかった。しかし、この調査では青とピンクの2色に限定していたことが影響していると考えられる。なぜならピンクの物は自然の中にはほとんど存在しておらず人工物に多いこと、人工物であるということは必ずしもピンクに限定された物ではなく、さまざまな色であっても良いことからピンクと事物が結びつきにくいと考えられる。

モチーフに着目すると、見立ての不成立の描画にはクラスや性別を問わず、提示された図形への2重描きや塗りつぶし、図形の中や外への自由な描画などがみられた。見立てが成立した描画では、4歳児クラスの男児では「車」「メロンパン」、女児では「星」「ドア」、5歳児クラスの男児では、「家」「ドラゴンボールの玉」「おにぎり」、女児では「雪だるま」「ロールケーキ」などが表現されていた。男児の「車」や女児の擬人化された「雪だるま」などには自由画にみられる性差との共通性が、食べ物を見立てて描画することは図形からの連想語調査との共通性がうかがえた。

図形の見立ての描画として成立するには、幼児が図形から何かをイメージし、描画表現するための描写力が必要となるため、5歳児クラス以前では難しいことが推測された。5歳児クラスの見立ての描画では形からの成立数をみると、見立ての理解も描きたいことを描写する力も備わっていることがわかる。5歳児クラスになるそれまでの間に、幼児自身がイメージを広げる契機となる造形活動や生活経験を重ねることが、見立てたりイメージしたりする力や描きたいものを表現できる描写力につながるということがわかった。この時期の幼児が考えたり思い浮かべたりすることや、形や色やさまざまな素材を使った造形活動を重ねることが、創造的な造形表現につながるということが考えられる。

今回の調査対象者数には年齢ごとに人数の偏りがあり、また十分な人数とはいえないことから、さらに追調査を行う必要がある。また、図形の線画の色が描かれたモチーフとの関連を見出すまでにいたらなかった。今後、色からの事物の連想について調査を実施した上で、図形から見立てられるものの色の影響についても改めて分析を試みる予定である。初発反応による図形の見立ては形が優先されることが明らかとなったが、今回の調査では男児と女児の嗜好色である青とピンクのみの線画だったことから、今後は色の特性も踏まえ色相環からの均等な色の選択も考えたい。

本研究は科学研究費助成事業「幼児の図形による見立ての描画表現—年齢、環境、性差からの検討—（学術研究助成基金助成（基盤研究（C）23531080））」の助成を受けた。

文献

- 今給黎禎子、藤原雅子、安川千代、松山光生、山田弘幸、倉内紀子、笠井新一郎 健常児の人物画の発達 九州保健福祉大学研究紀要 第7号 pp.153-159 2006
- 大橋康宏 幼児における色彩と図形の嗜好の検討 山陽学園短期大学紀要 第38号 pp.21-28 2007
- 川越奈津子、郷間英世、牛山道雄 [他]、池田 知美、郷間安美子 現代の子どもの描画発達についての研究 保育園幼児のグッドインナフ人物画知能検査による検討小児保健研究 第70号(2) pp.257-261 2011
- 酒井英樹、安藤麻里、村田浩子、佐藤昌子、幼児の色彩嗜好—保育園児の調査から—日本色彩学会誌 第29号 pp.44-45 2005
- 島田由紀子 幼児の色彩表現(2) チェコと日本の幼児の比較を中心に 美術教育学 第23号 pp.97-107 2002
- 島田由紀子 幼児の見立て—図形からの見立ての描画発達と性差— 美術教育学 第32号 pp.173-184 2011
- 島田由紀子 大神優子 図形提示からの連想語—4・5歳児クラスを対象に— 美術教育学 第34号 pp.231-242 2013
- 島田由紀子 大神優子 色名からの子どもの連想語 日本色彩学会 第36号 pp.64-65 2012
- 中尾繁樹 通常学級におけるインフォーマルアセスメントの有効性に関する考察2—描画と姿勢の観察から— 関西国際大学研究紀要 第12号 pp.13-24 2011
- 皆本二三江 0歳からの表現・造形 文化書房博文社 p.44 p.56 1991
- 島田由紀子 幼児の描画における色彩の移行過程について 日本美術教育研究紀要 第33号 pp.7-12 1999
- 皆本二三江 児童の描画におけるケニアとわが国の性差傾向の類似について 武蔵野女子大学紀要 第20号 pp.149-161 1985
- 郷間英世 川越奈津子 他 最近の子どもの描画発達の男女差についての検討 京都教育大学紀要 No.122 pp.101-109 2013
- 横出正紀 寺戸史子 造形的遊びにおける「みたて」の役割(3): 造形的みたての展開諸相と発達 美術教育学 第10号 pp.235-244 1980

島田由紀子 (和洋女子大学人間・社会学系准教授)

(2013年11月19日受付)